

舞踊作品 歴史概念と範疇概念から  
「形式と内容」にそって

日本女子体育大学名誉教授 松澤慶信

## はじめに

歴史の流れの背後にある思潮としての歴史概念が、実は作品の存立を基底する範疇概念と通じていること、だからこそ逆に作品の思想が歴史を必然的に変えていくこと、を形式と内容の関係を踏まえつつ、バレエやダンスを事例に確認する。

## 18世紀の芸術概念 絵画と物語

17世紀の新旧論争を経て art が技法や学問とは別に「芸術」として定着するにあたり、その概念規定として、美が見た目の美的形式原理（例えば黄金分割）に即して秩序を重んじる形式が整えられ、美のアイデアをミメシスする、写像ではなく模像という理想型を模倣することが美の理念となり、それを具体化する作業が自然美ではない美を作り出す芸術という営為であること。したがって18世紀はその芸術の中でも見た目の美を描写する絵画が模範となるが、しかしそこには「物語る」(action 筋を物語る story-telling, narrative) ことが前提となり、芸術は基本物語らなければならない。しかも18世紀の芸術が模範とする絵画と、芸術であるための必要条件を満たす物語の両立を行うのは、実は物語ることが物理的に難しい静止芸術(非時間芸術)としての絵画の「物語画」以上に、物語ることを確保するための時間性を物理的に擁する時間芸術である「動く絵画」としてのバレエである。したがってバレエは絵画以上に絵画的であることと物語の両方を満たす18世紀の芸術の模範であったといたい。しかもこの時代の ballet d'action は explicit な筋にシンプルな表現形式のバレエ・テクニクが均衡し合って素朴な classicism 古典主義となり、バレエは ballet d'action (筋立てバレエ) という theater dance として確立され、18世紀は思いの外にバレエにとって幸せな時代であった(舞踊「学」としても)。

## 19世紀ロマン主義の台頭 そして formalism expressionism へ

産業革命とフランス革命を経て新興市民が登場すると芸術のパトロン役割が市民に降りてきて、当然芸術鑑賞の対象者はもはや王侯貴族や教会関係者ではない市民となり、芸術は彼らの求めるものを目指すようになる。

感情を表に出すことをよしとしないのではなく、わかりやすく感情を露わにする物語を表現する芸術へと変貌していく。つまり形式<内容となる romanticism の時代を迎え、バレエも当然その時代精神を背負って complicated な物語を吐露する作品が作られていき、歴史概念と範疇概念の口

マンティックなバレエが生まれる。

19世紀後半になると、実は表現することの形式へのこだわりから純粹形式への関心が先に興っていたもののその決定的指針となったのは E. ハンスリックの『音楽美について』(1854)で、音楽は内容ではなくその音の構成こそが重要であるという形式>内容、つまり音楽の表現内容はゼロ度とみなして形式への関心をそそることになる formalism を宣言し、芸術は物語よりもその表現の形式・形態・構成が重視されるようになり(ワグナーとブラームス論争)、やがて W.ペイターは『ルネサンス』(1873)で「すべての芸術は音楽にあこがれる」、つまり何かを representation するのではなくそれ自体で屹立する芸術の模範として音楽を上げて、いわば抽象芸術を礼賛するきっかけをあきらかにする。

そして、自らの思潮とは一見真逆の formalism を生むことになるこの romanticism は本来の人間の心情を吐露する from the inside out である表現主義 expressionism への道を確認し、芸術は romanticism から formalism と expressionism の真逆の二つの思潮を生む。前者は意味のゼロ度して指示対象を精確に伝えられない音楽をモデルとし、後者は感情を表現する媒体として例えば言葉による小説が芸術となる。そして19世紀に生まれたこの2大思潮は modernism として20世紀に花開くことになるが、はたしてバレエはどうなっているのか。

バレエは感情を表現する手法に、しかし新しい表現形式であるポアント技法をほぼ同時代に得ており、やがて形式=内容の古典主義を謳歌することになって、まさに「クラシック」なバレエがさらに M.プティパによって確立され、そして彼こそが dancing シーンと narrative シーンを分けることで、バレエはようやく一見遠回りしながらも formalism への道を進むようになる。

## 範疇概念として

上記の歴史概念を規定してきたのは、表現内容とその表現形式の関係であったが、実はダンス作品の在り方もこの二つに規定されると考えたい。作品の表現内容が物語から感情へ、そして表現形式がポアンを得ることによって古典主義の安定期を得てバレエ作品の確立をみて、バレエも物語を捨ててバランシンに代表される formalism の抽象バレエへと向かう。つまり形式が作品の見所となる。しかし実はその中間期にフォーキンの『Les Sylphides』にある情景バレエを経るが、これこそがダンス作品を存立させる形式と内容の混合という特徴であるかもしれない。そしてこれは共感から共振(時間分節の共有)というダンスの鑑賞体験を説明する契機ともなるであろう。これらは結局身体とその動きという媒体に支えられて。